

収録・解説 酒井董美

語り手 山口忠光さんのぞいていた。

(明治40年生まれ)

昭和63年8月19日収録

## あらすじ

昔。たいへん信心をする人があった。その人が六十日に一ぺんずつ来る庚申こうしんさんを本気で祭っていた。

ある庚申さんのときに、ふと夢を見た。「いもんやるから目を覚ませ」と庚申さんが言われたので、目を覚ますと目の前に扇が一つ落ちていた。「右であおげば長くなる。左であおげば短くなる」とどこからか声がする。それを聞いて、その人は、「いいものもらったから、ぜひ遊びに出てやう」と、大阪まで出たら、鴻池こうちの娘さんが、格子から外を

## 不思議な扇

(東伯郡三朝町大谷)



イラスト・福本隆男

## 長者の娘の鼻高くし治す

「一つ試いてみたら」と右であおいだら、娘さんの鼻が、三尺まで伸びた。「えらいことになった。」「この家はそ

たところの家では大騒ぎ。がなことですか。」「いや、おまえに言うひつこまない。」「困った。」「さん

だ。入ってごせえ」といふこと、その人は中へ入って行った。その人はたいへんにもてなしてもらい、お金ももらって、それで涼しい顔を

## 解説

語り手の山口さんは「幼少の頃、祖母から聞いたことだった。閑敬吾博士の『日本昔話大成』の戸籍では、主人公が鼻を高くしたり低くすること

「いや、わざわざ用があつて出よつかと思つとる。」「こゝで逃げられちゃあ困る。鼻が元の通り治るまでおつてもらわにゃ。金があるなら出しますから」と引き留められてしまった。

それでも何日もいるわけにはいかないので朝一寸、昼一寸、晩一寸と少しずつお嬢さんの鼻を縮めて、三日ほど泊まっていた元の通りに治したそう

「元鳥取短期大学教授(水曜日に掲載)」。元鳥取短期大学教授(水曜日に掲載)。

(元鳥取短期大学教授(水曜日に掲載))

な。そうしたら「こりゃ